

心が洗われるようなこんな清々しい気持ちになったのは何時以来でしょうか。130名を越す参加者の皆さんもきっと同様の静かな、そして深い感動を覚えたであろう関根先生の講演会でした。

耳慣れない言葉ではありますが、「臨床美術」と称して20年以上に渡り仲間の医師や芸術家と共に認知症の患者さんやそのご家族の支援活動を行ってきた関根先生、主にご家族のカウンセリングを通して多大な貢献をされてきました。今回は様々な体験や思い、そして我々側に必要な「発想の転換法」について一気に語って下さいました。

講演の中では、永年にわたり多くの患者さんの問題行動から、認知症の方々の共通の特徴的な行動パターンを挙げておられます。同じ認知症の父を持つ私にとってもこれは目から鱗の衝撃的なお話で、あまりに凶星なので思わず座布団を差し上げたい気持ちで一杯になりました。

① 忘れ方が特徴的：つい先程の事を全体でストンと忘れる（例、行楽地で一緒に楽しむことは出来ても帰りの電車の中では忘れてしまう。又、電話に出て普通の受け答えは出来るものの切った後は誰と何を話したか覚えていない等。家族にとっては、まるで喧嘩を売られているようで許せない思いが一杯になる）。

② 段取りが苦手：2つの同時作業が出来ない（例、食べ物などでは蕎麦など、汁につけながら食べることが出来ず、一品を食べ続ける等）。

③ 待つことが出来ない：本人は大丈夫と言いながら最長で3分もしたら我慢できず、その場から離れてしまう。

④ 責任転嫁が得意：その記憶が全く無いので他人のせいにしがち。高いプライドだけは失わずに持ち続けているので、さらに追求されると自分が責められることが許せず、コントロールできない怒りにつながる。

ありがとう



このような人格の土台にかかわる能力の喪失により患者さんは周囲から阻害され、生きてゆく上での居場所そのものも失ってしまいます。そして叱られれば叱られるほど認知症の症状は悪化してゆくのだそうです。でもここからが関根先生の聖職者としての奇跡の逆転の発想です。